

---

# 白い髪のも付きのIS

どりーむ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白い髪の毛付きのIS

### 【Nコード】

N3142Y

### 【作者名】

どりーむ

### 【あらすじ】

ブリュンヒルデの暴走によりブラックホールに吸い込まれた僕とキングゲイナー。 だけど目が覚めたらなんとヤーパーンにいた！？でもここは僕たちが目指していたヤーパーンとは違う世界で、オーバーマンやシルエットマシンの代わりにISと呼ばれるオーバーコートのような物がメジャーな世界だった。でもこのISは女性にしか動かせないらしくこの世界は女尊男卑が成り立ってしまったている。でもどこにしようが僕とキングゲイナーは負けない！！やるぞキングゲイナー！！

## 第0話 キングは暗黒の中に（前書き）

なにも男ばかりがロボット好きだと思ったら大間違いです。

## 第0話 キングは暗黒の中に

一面が雪で覆われた大陸。

その地のどこかで髪の毛の様な何かを生やした白いロボットと左腕に大型ライフルを付け、巨大な右腕をしたオレンジ色のロボットが、数多くの地を走る茶色のロボットや水色のロボットと戦闘を行っていた。

「くっ……今回は絶対数が違いすぎる！ どうしますゲインさん！？」

「たしかにこのままだとまずいな……ガウリ隊はまだ足止めを受けているから援軍はなしか……よし、ゲイナー離れる！ ブリユンヒルデで一掃する！！」

ゲインと呼ばれた男が乗っているらしいオレンジ色のロボットが右手を構える。

すると右腕から黒球が放たれ、さらに黒球の中からピンク色の異形の生物が現れた。

「おまえの力を貸してくれブリユンヒルデ！！」

ゲインの話を理解したのかブリユンヒルデと呼ばれた生物はたちまち巨大な黒球を作り出し敵を吸い込んでいく。

「このまま殉職なんてたまるかよ！！」

「やばい！ 左遷されちまう……」

どこか緊張感の欠けた台詞を吐きながら脱出していく的のパイロット達、だがブリユンヒルデの勢いはとどまる事をしらなかった。

「もういいブリユンヒルデ！ 戻るんだ！！」

「どうしたんですブリユンヒルデは？」

「わからん！ こちらのコントロールを完全に無視している……とりあえず今はブリユンヒルデを止めるぞ！！」

「くっ……こんな時に暴走するなんて！」

「気をつけるゲイナー！ どうやらブリュンヒルデはお前を狙ってるぞー！！」

「キングゲイナーがかつてオーバーデビルの眷属だったからとでもいうのか！？」

「そっちに行ったぞ！ 避けるゲイナー！！」

「なっ、しまった！」

キングゲイナーがブリュンヒルデの両腕に押さえつけられた。ブリュンヒルデはこのまま黒球でキングゲイナーを吸い込もうとしている。

「ゲイナー！！」

「動け！ 振り払うんだキングゲイナー！！」

だかなす術もなく、キングゲイナーはブリュンヒルデの放った黒球に吸い込まれていった……………

第0話 キングは暗黒の中に（後書き）

感想お待ちしています。

ゲイナー「オーバーヒート！」

**第1話 夢見たキングと念願のヤーパーン!? (前書き)**

今作は縦書きを意識して打ち込んでます。

## 第1話 夢見たキングと念願のヤーパーン！？

(僕は……ここで死ぬのか)

ゲイナーは吸い込まれた黒球の中を漂いながら今までの思い出を思い返していた。俗に言う走馬灯というやつだ。

だがその中に自分の体験した事とは全く別の出来事が頭の中をよぎり始めた。

(な、なんだ……僕が体験した事ない記憶があるぞ!?)

それはかつて自分が倒した最悪の悪魔、オーバーデビルが見た事もない街を破壊し尽くす映像だった。

(ど、どうということなんだ?)

《それは少し先に起きる事になるかもしれない出来事》

「だ、誰だ!？」

後ろから聞こえてくる声に振り向いたゲイナー。その先には白いワンピースを着た長髪の少女が立っていた

《この異能の悪魔を討ち取った貴方なら……》

「僕が必要とされている？」

《貴方の力でこの悪魔を……討ち取ってください……》  
するとゲイナーの体が光に包まれていく。

「待ってくれ! 君は、君は誰なんだ!？」

《私はいつも……貴方と共に……》

「な、なんだって? う、うわあああああああああああああああああ  
ああ!?!」

そしてゲイナーは光につつまれた。



「……る」

「ん、んん？」

「起きろと言っている」

「い、いったあああああああああああああああああ！？」

突如、僕の頭にやってきた衝撃で僕は意識を取り戻した。

「な、なんだまたシベ鉄の奴らか！？」

辺りを見回すとそこにはピシツとした黒い服を着た威圧感のある女の人が立っていた。(な、なんて気迫なんだ……アデット先生と互角、いやそれ以上じゃないか?)

「貴様、今失礼な事を考えなかつたか？」

「い、いえそんな事ありません！」

な、なんで考えてる事がわかつたんだろう…… それはともかくここは何処なんだ？

シベリアはもつと肌寒くてなにより、一面が雪で覆われていた。ただどこは肌寒いどころか雪の結晶一つ見当たらない。

とりあえずこの人に聞いてみるか……

「あの、お聞きしたい事があるんですけど……」

「なんだ言ってみろ」

「ここはどこですか？」

「貴様IS学園を知らんというのか？」

「あ、あいえすがくえん？ あの、僕が聞いたかったのは大陸の話で……」

「大陸？ おかしな事を聞く奴だ。ここは日本列島。日本と呼ばれている島国だ。これでわかつたか？」

「日本……」

そういえば昔、ママドウ先生の授業で聞いた気がする。たしかウルグスクの遙か東の大陸が確かそう呼ばれていて僕達が…… ってまさか！？

「じじってヤーパーンなのか!?!?」

第1話 夢見たキングと念願のヤーパーン!? (後書き)

全体的に短い気が……

感想お待ちしています。

ゲイナー「オーバーヒート！」

## 第2話 キングと形を変えた相棒（前書き）

こちらは基本2週間に1話更新で頑張ります。

## 第2話 キングと形を変えた相棒

「もう一度聞く。貴様は誰だ？ なぜIS学園にいた？」

僕は今、密室の様な場所に連れてこられて話をされている。ガウリ隊長がたしかこういう時は『カツドン』という食べ物を出されてから話し始めるのが礼儀だと言っていたから僕はまだなにも話していない。

「貴様……少しぐらい口を聞いたらどうなんだ？」

ガウリ隊長、ほんとにこれでいいんですか？ なんだかますます怒らせてる様な気がするんですが……

「仕方ない、少々古典的だが……山田君！」

「は、はい！？」

黒スーツの女性が緑髪の女性に何か合図をした。

そして数10分後……

僕の目の前には底深なお皿が現れた。しかもそれ専用の蓋で閉じられている。

なんだろうと思ひ、僕は蓋を開けてみる。すると香ばしい香りと共に現れた煙が僕の顔を包み、食欲を誘い始めた。

未知の食べ物に僕は思わずこれはなんなのか聞いてしまう。すると黒スーツの女性は若干惑いながらも答えてくれた。

「貴様カツ丼も知らんのか？」

「こ、これカツドンなんですか？ これが！？」

ま、まさか『カツドン』がこんな美味しそうな食べ物だったなんて！

僕は我慢できずにカツ丼を一心に食べ続けた。

そしてまた数10分後……

「ごちそうさまです。僕はゲイナー。ゲイナー・サンガです。」

「なんだ、急に喋り始めるとは。貴様腹でも減っていたのか？」

「それもありましたけどヤーパーン……日本ではこういう時、『カツ井』を相手から奢ってもらってから話を始めると僕の知り合いが言っていましたので」

「その知識は大分間違っているがまあいい。私は織斑千冬おりむらじちふゆ、このIS学園の教師を務めている。それでは改めて聞くぞ。名前は……サンガだったか。なぜあの場にいた？」

「それは僕にもわからないんです。突然頭に衝撃がやってきたと思ったらあの場にいましたから。」

何か大事な事を忘れている気がするけど……

まあそのうち思い出すだろうしいいかな。

「どうやら嘘は言っていないようだ。では次の質問だ。お前の存在が確認された時、同時にISに似た反応もあった。サンガ、お前ISを持っているのか？」

「待ってください。あいえすってなんなんですか？」

「お前、ISすら知らないと言うのか？ まあいい説明しておこう。ISとは……」

織斑さんの説明を簡単に纏めると『IS』、正式名称はインフィニットストラトス。宇宙空間での活動を想定したマルチフォーム・スーツという物らしい。でも攻撃力、防御力、機動力は現存する兵器の中で最強の性能を誇るといふ。でもこのIS、どうしてなのか女性にしか操縦する事ができないらしい。

「……という事だ。理解できたかサンガ？」

「はい、なんとか」

つまりは高性能だけど女性にしか使えないオーバーコートと違っていて大丈夫だろう。

「また話がズレたな。サンガ、お前はISを持ってないのか？」

「持っていないかと聞かれましてもそんな事……なんだこれ？」

思わず視線を手元に下ろした僕の視界に見覚えのない物が見えた。僕の右手首に付けられた金色の腕輪だ。でもこれ、どこかで見たよ  
うな……………」

「どうした、サンガ？」

「いえ、僕の見覚えのない物が右手に着いていたものですから……  
……………って思い出したぞ！」

「そうだ！ どこかで見たような気がしてたんだ！！」

「これ、キングゲイナーの腕輪だ！！ 織斑さん、こいつを調べて  
みてください！」

僕は思わず大声を上げながら腕輪を織斑さんに渡した。

織斑さんが解析の為少し預かると言って部屋を出て行った。僕の  
予想が正しければあれは……………」

数時間後……………」

「遅いな、織斑さん……………」

「サンガ、ついて来い」

僕は織斑さんに呼び出されて、後をついて行った。そして着いた  
のはすごく広いスタジオのような場所。

前にヤーパンの天井でエキデンのスタート地点になった所よりも、  
もう少し広いつて感じた。

「サンガ、まずはこいつを返しておこう」

「織斑さん、どうでした？ あの腕輪」

「とりあえず少しは落ち着け、そんな風に気持ちが高ぶっては  
話も耳に通らんだろう」

「あ、すみません」

とりあえず気持ちを落ち着ける為に深呼吸。そして改めて聞き直  
した。

「そ、それで……………どうでした？」

「たしかにあの腕輪はISだった」

「やっぱり!」

「だが解析してわかった事だがあれはISを色々な意味で逸脱している」

「え……? ど、どういう事なんですか?」

「まずそいつにはシールドエネルギーが存在していない。そして絶対防御もない。」

「それってISとしては致命的なのでは?」

「そうだな、だがそいつはISの拡張領域とは比べ物にならない量を搭載できる拡張領域を持ち合わせている。これも実際は拡張領域とは違う物だったがな。そしてほぼ尽きる事はないであろう謎の動力機関。この二つのおかげで前者の二つの欠点が十分補える物となっている」

「そ、そんなにすごいんですか……」

「というわけでサンガ、そいつを展開してみる」

「な、なにを言っているんです? ISは男には使えないはずですよ?」

「それは厳密にはISと違うと言っただろうが、馬鹿者。それに……」

「……」

「それに?」

「学校中の教師に試させたが誰も展開する事が出来なかった。無論、私もだ。」

「こ、この人は他人の物を勝手に使おうとしてたのか。仮に展開ができていたら僕はここから放り出されていただろうな……」

「じゃあ展開して見ます。何か展開時にコツはありますか?」

「基本は身体に纏おうと念じればいいはずだ。あとは個々で別れる」  
「わかりました」

(身体に……纏う感じに……)

すると僕の身体は光に包まれ、光が消えた時には青を基本とした身体に脚には膝まである白い装甲、腕には肘まである白い装甲に手首に黄金の腕輪、胸部を守る白い装甲、そして丸い頭部にゴーグル、



そして六つの髪の毛のようなパーツがたなびき、腰には小さなポシエットを付けた機体になった。

「ほう、全身装甲か……」

「やっぱりこの機体は……」

僕が身体を見回していると目の前に小さな欄が現れた。

《SETUP? NEWID ENETIFY CODE》

「これは……ふふ、懐かしいな。勿論名前は……」

僕は映し出されたパネルに迷う事なく名前を打ち込んで行く。

《KING - GAINER》

「こいつの名前はキング、キングゲイナーだ！」

「キングゲイナーか……王の名に自分の名前とはなかなか面白い事をするじゃないか」

『それならキングの名が伊達じゃない事を証明してもらおうじゃない!!』

「なっ、誰だ!？」

突然聞こえてきた女性の声に僕は驚いて周りを見渡す。

……見つけた。観客席の方に水色の髪をした女性が立っていた。

手に持つ扇子には『勝負!』と書かれている。

「お前が更識さうしき……」

織斑さんがやや呆れた様子で溜息を吐いた。そんな事は気にせず  
に更識と呼ばれた人は何時の間にか僕達の目の前に現れて僕に話しかけてきた。

「君が学園に来た不審者君かあ。でも君IS動かせるんだね、お姉さんびつくりよ？」

再び更識さんが扇子を開く。するとそこには『吃驚!』と書かれていた。どうなっているんだ、その扇子?

「せっかくだし、私と一戦交えない? 自称キングの髪の毛君?」

「僕は自称キングなんかじゃない、真正銘キングなんだ！ いいさ、やってやるうじゃないか！！」

たしかママドウ先生が言っていたな。こういうのを『売り言葉に買い言葉』っていうんだって。でもキングの名を馬鹿にされたんじや黙っちゃいられない！！

「どうやらやる気のようにだな……よし、わかった。今から数分後に模擬戦を始める。更識は向こう側のピットにて準備をしておけ。サング、お前はこっちだ」

織斑さんがこの場を上手く纏めてくれた。そして僕は織斑さんの後について行く。

あの水色女、必ず倒してやる！ キングはどんな状況でも負けないんだ！！

**第2話 キングと形を変えた相棒（後書き）**

ガウリ隊長の何かが違う日本知識は秀逸だと思う。  
感想お待ちしています。

ゲイナー「オーバーヒート！」

### 第3話 キングと学園最強（前書き）

ゲイナーは織斑先生の出席簿アタックにより、大事な使命を忘れて  
います。

### 第3話 キングと学園最強

「いいか、サンガ。相手は学園最強のIS操縦者だ。お前がどんな経験を積んできたのかは知らんが油断だけはするな」

「わかりました。キングゲイナー、出るぞ！」

織斑さんのアドバイスを受け、僕は再びキングゲイナーを纏ってピットを飛び出した。

アリーナには既に更識さんが待機していた。

「そいつがIS……まるで水のドレスかマントを着ているみたいだ」  
ミステリアスレイディ

「霧纏の淑女って言ってるね、私の専用機よ。もしかしてお姉さんに見惚れちゃった？」

「まさか、それにあなたはとてもしゃないですが淑女には見えませんよ」

「ふーん、まさかこのご時世に女を馬鹿にできる男がいるなんてね」  
『どちらとも準備はいいか？』

アリーナに織斑さんの声が響き渡る。

「いつでも大丈夫です」

「こつちもOKよ」

『それでは模擬戦……開始！』

「先手はいただくわよ！」

更識さんが手に持つ槍をこちらに向けたかと思うと、四門の銃口から弾丸が飛び出してきた。

「チェンガンと似たような武器なのか！」

僕は慌てずにフォトンマトリングを展開し、空へと回避した。

その間に僕はチェンソーと銃が組み合わさった武器、チェンガンをポシエットから取り出した。

「弾込めは済んでいる！ やらせてもらうぞー！！」

チェンガンから放たれた弾丸は真っ直ぐに相手に向かっていった。が、弾丸は相手に届く事なく展開し水のマントのような物で防がれ

てしまった。

「この程度の攻撃じゃビクともしないわよ？」

「あのマントは防御の役割を果たしているのか！」

「それじゃ今度はこちらからいかせてもらっわ！」

更識さんの背後からもう一人、水で出来た更識さんが現れ、手に持つ槍をこちらに向け、発砲してきた。だが先程の攻撃よりも精度が悪い！

「この程度の攻撃、目を瞑っていても避けられる！」

「あら？ 目なんか瞑る余裕はあるのかしら？」

「なに！？」

声が出た方を振り向くと目の前には同じく水で出来た剣が蛇のように飛びかかってきた。

「くそっ！」

間一髪、チエンガンで剣を受け止めた僕はそのまま剣を叩つ切る。

「あら、なかなかの反射神経じゃない」

「それはどうも！」

僕はそのまま更識さんに突っ込みチエンガンを振り下ろす。

「掠っただけか！」

「け、結構速いのね……そのIS」

「ならあ！」

僕はチエンガンをポシエットに戻し、構えをとる。

「今度はなにかしら？」

「ゲームでも使った必殺技！！」

そして僕は一瞬で更識さんの背後に回り、渾身の一蹴りを浴びせる。

「オーバーマルチキックだ！！」

「きゃああああああああああ！！」

吹き飛ばされて、アリーナの壁に激突する更識さん。これはかなり聞いたはずだ！

「絶対防御があるとはいえ、レディを蹴り飛ばすなんて君もなかなか

か荒っぽいね。しかも不意打ち」

「でも勝負は勝負です。それに今のであなた shields エネルギーは大分減ったはず。対して僕はまだ直撃を一つも受けていない。大人しく降参したらどうですか？」

「まさか、この程度で降参するなんてありえないわ。それにあなたが気づいてないの？」

「なんの事ですか？もしかしてこの少しづつ深くなっている霧の事ですか？生憎ですが僕にはこの程度の霧じゃ目眩ましなんて効果はないですよ」

「フフフ……残念だけどその霧は目眩ましなんかじゃないわ」  
すると僕の周りの霧が更に深くなっていく。

「な、なんだ!?!」

「もう遅いわ。これが霧纏ミステリアスレイディの淑女の武装の一つ、清き熱情よ」  
直後、僕は爆発に包まれた。

「意外とあっけなかったわね」

私はそう呟き、ピットに戻ろうとした。

「まだ終わってないですよ」

「え!?!」

聞こえるはずのない声が聞こえて、私は思わず後ろを振り向いた。そこには倒したはずの自称キング君が不思議なリングを纏い、立っていた。

「嘘!?! 一体どうやって!?!」

「驚きましたよ。まさかフォトンマツトリングを殆ど貫通する威力だっただなんて」

「清い情熱を防いだの……!?!」

「今のでそちらのシールドエネルギーが大分減ったはず！悪いが一気に決めさせてもらう！」

自称キング君のISの頭部の模様が変わったかと思うと髪の毛のようなパーツが逆立ち、ユラユラと動き始めた。すると自称キング君のISの後ろから吹雪のような物がこちらに襲いかかってきた。

「な、なにこれ!? 吹雪!?!」

「キングゲイナーのオーバースキルはこういう事も出来る!?!」

「水が……アクアクリスタルが凍った!?!」

私を守っていた水の核のような存在であるアクアクリスタルが凍った。という事は私を覆っていた水も凍っていくという事だ。

「身動きが……取れないっ!」

目の前にはこちらが動けなくなつたのを確認してチェインソー型の銃剣を構えながらこっちに突撃してくる自称キング君。

「はあああああああああ!?!」

そして私はなす術もなくチェインソーで切り裂かれ、シールドエネルギーが尽きて負けた。

『そこまで! この模擬戦、サンガの勝利だ!?!』

どうやら学園最強の座はキング君に渡さないといけないみたいね

……

ピット戻ると織斑さんが待っていてくれた。

「まさか勝つとは思っていなかったぞ。よくやったなサンガ」

「あ、ありがとうございます」

「どうした? えらく疲れているじゃないか?」

「こっ……激しく身体動かしたのは……はじめてですから……」

「なんだと?」

機体を動かかし続けて体力が思ったと比べてたけど、やっぱり実際に身体を動かすと大分違ってくるな……

「すみません……限界です……」

「お、おいサンガ!?!」



僕はキングゲイナーを解除してそのまま倒れこみ、意識を手放した。

「ここは……？」

目が覚めたら僕はベットに寝かされていた。

「ここは保健室だ」

隣には織斑さんがようやく起きたか、といった感じの顔をして座っていた。

「身体の調子は大丈夫か？」

「まだあちこちが痛いですけど大丈夫です」

「そうか、ならば話をするぞ。サンガ、お前はIS学園に入学してもらおう事になった。」

「本当ですか？」

「嘘を言ってどうする。それにこのご時世に身元不明の男、しかもIS…… 厳密には違うがな。それを起動させる事ができ、しかもかなりの実力者のお前を放っておいてはかなり危ないだろうからな」  
たしかにこの女尊男卑の時代にISに似たような機体を持ち回していたら何をされるかわかったもんじゃない。

それにキングゲイナーを盗られるかもしれないからな。

「そうですね、ありがとうございます。織斑さん」

「（それにあの瞬間移動といい吹雪を使った攻撃といい調べておかないといかんだろうからな）」

「織斑さん？」

「ん？ ああすまない、少し考え事をしていてな。それと今後は私の事は織斑先生と呼べ、わかったな？」

「わかりました、織斑先生」

こうして僕はIS学園に入学する事が決まった。

### 第3話 キングと学園最強（後書き）

更識さんの口調がよくわからないし、水分身みたいな捏造技作って  
しまった……

あと戦闘シーンに自信がない……

感想お待ちしています。

ゲイナー「オーバーヒート！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3142y/>

---

白い髪の毛付きのIS

2011年11月16日23時06分発行